阿部知二全集

第11巻

阿部知二全集

第11巻

河出書房新社

阿部知二全集　第11巻

一九七五年五月十日　初版印刷
一九七五年五月十五日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話（〇三）二九二一―三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

現代人——9
偉大なる私生児——20
歴史的感覚——33
抒情と表現——44
二十世紀文学——54
世界文学への結びつき——63
アメリカ文学遠望——70
翻訳と翻案——77
横光利一——83
他と異ることの怖れ——88

ハムレット 92
南人・北人 105
人の発見 113
映画と文学 116
現代の文学 121
序 121
意志について 123
個人主義について 131
知性について 140
想像力について 150
時間と空間 168

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

フェミニズムについて——176
伝統について——192
心理について——200
倫理について——210
文学概論——文学と自由、序説として——219
Ⅰ序として——歴史と文学　Ⅱ想像力と創造　Ⅲ言葉の問題　Ⅳ認識と鑑賞　Ⅴ　歴史の動き　Ⅵ文学と社会　Ⅶ文学の人間観　Ⅷ変革と永遠
芸術の社会史——249
第一章　芸術の出発／第二章　風土・階級／第三章　芸術の変革／第四章　社会と個人
求めるもの——東西ヨーロッパで考える・1——324

求めるもの——東西ヨーロッパで考える・2——　335
中国の近代・現代文学に面して——　353
長与善郎断想——　367
書評一束——　369
掌(窪田啓作)／「異邦人」を読む／カーヴィルの奇蹟(マーティン)／ダブリン市民(ジョイス)／シベリヤ物語(長谷川四郎)／芸者小夏(舟橋聖一)／農民は都会人にうったえる(松丸志摩三)／松川裁判(広津和郎)／無関心な人々の共謀上・下(ヤセンスキー)／わが青春の告白(神近市子)／チェーホフ作品を読みなおして(エレンブルグ)／シェイクスピアの研究(モローゾフ)／中国現代文学選集⑮——記録文学集Ⅰ(平凡社版)／歴史とは何か(E・H・カー)／声の狩人(開高健)／「ラーマヤーナ」の魅惑／忘却の河(福永武彦)／ドゥホボール教徒の話(木村毅)／豊島与志雄著作集第4巻(未来社版)

解題——福田久賀男 391
解説——小田切秀雄 400

阿部知二全集　第11巻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

現代人

現代人とは何かということを友人と話し合ったことがあった。

現代人という言葉が、私を当惑させた。考古学者たちは、この七八千年間の文明を同一の様態のものと見よと告げるからである。――たとえば、「近代人の生涯の出発点は、紀元前五百年どころでない。いやおそらく紀元前五千年どころでもない。」「我々はクノッソスの巧緻な下水施設をみてわが家に在る感をおこし、古墳墓のうちの化粧料に現代を見出しては切なさに打たれる。」（レナード・ウリ「過去の発掘」）という。それであってみれば、時間の区切をつけて、特別にめあたらしい現代人を想定するということには、意味を見出しがたくなる。ただ、現代に生きている無数の型の中での最適格者というべきものを考え、それを現代人と呼ぶほかはなく、結局その資格としては、行動性、――もちろん科学と技術とを可能の最大限に駆使するそれを指摘しなければなるまい、と友人と私とは一致するほかなかった。太古以来、おのおのの時代に、この行動の選手だったものが「現代人」だった。今日でもそれに変りはなく、日本でも世界でも、それが最も切実な課題である。善神にもあれ邪神にもあれ、行動は人間がいまも最も渇仰しているものであり、それに無関心なものは現代の落伍者である。その気風は現実の生活だけでなく思想や文学の世界をも揺りうごかし、他の事柄はそれに比べて色褪せたものになってしまっている。まして今は、目前にアメリカ人がその確乎たる行動主義をみせている。行動人が現代の勝利者であり英雄であり、人がそれに惹きつけられることは当然である。

しかし、先ずはじめに、無条件の行動礼讃の危険と害とについて思わずにおられぬというのは、すでに私が現代人として失格しているからでもあろうが、今度の戦争での我

我の破綻が、盲目的行動の恐しさを示したものであることはたしかでなかろうか。ヒトラー的ムソリーニ的行動主義に憑かれたものは、強ちに軍人ばかりではなく、社会一般の人間にも、意識的にか無意識的にか、行動への衝動と狂信との火が燃え上っていたことはまちがいないところだ。行動のファナティシズムは明かに現代世界の一つの流行病的性格であり、毒々しい魅惑がそれにひそんでいた。理性の弱い人間に対しては、行動は魔神としての力を揮って、犠牲を強要する。しかもその狂熱の火はまだ消え切っておるとはいえず、いまの日本人にしても、一部分は茫然として無為懶惰の境に沈みこもうとしてはいるが、一方では行動への衝動と焦躁との余燼は燻りつづけ、いつ無目的な爆発を見せるか分らぬありさまである。行動の問題は一向に解決しては居ない。

*

数年以来、私は日本や中国のいくつかのところで、青年や学生に向って、「ゲエテと狂犬」とでも名づくべき他愛のない比喩譚をしてきた。——君がゲエテだったとしてみたまえ。そして或日瞑想しながら野を歩いているとしてみたまえ。君の頭のなかには、いま「ファウスト」の詩想が生れてあふれてきているのだが、もしこのとき一匹の狂犬がおどり出して嚙みついて来たとすればどうなるだろうか。「ファウスト」もそれを創造しつつあったゲエテの生命も立ちどころに滅びてしまう。それらはついに狂犬の牙に対して無力であり、故に劣るものであるだろうか。さて、人間の生活にはそのような事態はたえず起りつづけているのであり、ありていに云えば、現代にも、ゲエテとその詩想とは狂犬の牙に及ばぬ、という価値観を有ちその信条にもとづいて行動している人間が、じつは多数を占めていると思われるふしがあり、しかもそれは無知で無恥な暴言としてばかりでなく、一見堂々たる哲学の皮をかぶっていることすらある。——それに反して、たとえ滅ぼされようとも、「ファウスト」とゲエテとは飽くまで犬の牙より貴いのだと考えているものもあろうが、現代人はそのような思想を一個の老耄の無抵抗主義としてわらい去る流行を有っておらぬだろうか。

告白をすれば、私に現代の知的な青年諸君の思想を満足させるような解答はない。——きわめて日常的な常識に頼るならば、ゲエテはしばらくその詩想を休息して、棒か石ころか小刀かをつかんで、狂犬と同一の世界にまで降り立って闘い、もし相手をたおし得たならば、また元の詩の世界に戻って行く、ということのほかにない。事実、太古このかた人間は自然発生的に本能的にそのような手段をとって生きのびて来たのである。——しかしこれは、場当りを

集積した慣習にすぎぬのであって、解決ではない。太古このかたの人間の不幸と苦悩とは、この二つの世界の相剋に対して、さまざまの思想家の努力にもかかわらず、決定的な解案を有っていないということにある。現代でもこれは慣習に放置され、一方で矛盾と悲惨とはその強さと大きさとを増大しつつあるかに見える。「ファウスト」と狂犬の牙とは二つの世界――範疇を異にする二つの世界であって、一つの規準による価値観をもって扱い得ぬのであり、前に「相剋」とはいったが、それならば結びつけて考えることも出来ようが、じつは相剋以前の状態に置かれているのである。相交わらぬ二つのものを考え合わせてみようとしても、もどかしくなり頭が混乱してくるばかりである。人間生活の不安定はこうして連続し、拡大すらして行く。為し得るのは常識と慣習による処置だけである。思想は無力である。考えうることは、「自分はそのいずれを愛するか」ということ、――そして、パスカル風にいえば、「ファウスト」の世界と犬の牙のそれとの、「いずれに賭けるか」ということのみである。

*

今度の戦争の勝者が狂犬の側ではなかったということについては、いまさら私の言葉を必要としないだろう。

私はもっと手近かなこと、――日夜眼にふれてくるアメリカ兵たちの振舞についての感想を書いてみよう。それにはファナティクな色合はない。眼を血走らせ肩を怒らせた「行動主義者」はみあたらない。ゆとりがなく険悪の気を帯びた行動家や、言葉だけを息切らせながら絶叫する行動家というものを彼等の間に見出すことはできぬであろう。第一、彼等はおそらく「行動主義」というような信仰を意識してはおらず、ただ当りまえのことをしているとしか感じておらぬのであろう。従って、その行動には無理がなく、節度と平衡感とがあり、その能率はなめらかに永続して行き、彼等はその行動自体をたのしんでいるのにちがいない。それを本物の行動主義というべきであろう。

ある権威のある日本歴史の本を書いた英人は、「新しがり」が日本人の昔からの性癖だといっているが、またここで性急にアメリカ的な行動性の模倣をはじめたとすればどうだろうか。その進歩的な意志は全く正しいとしても、義務感にしばられ、いや脅迫感に追い立てられたような能率と行動主義とが流行するとき、合理的であろうとする狙いは、逆に、非人間的であるがゆえに非合理的なものにいつしか転化し、疲労ばかりが社会をとらえ、その生命力も枯れてしまうことにはならぬだろうか。それをもし日本的現代とするならば、むしろ己の分を守って東洋風の安息にしばらく落着くことの方が健康にかなうであろう。

アメリカの行動主義を内から支えて、それを自然で合理的なものとしているのはプラグマティズムと呼ばれる精神であろう。またそのことを格別にさわぎ立てぬところが、その精神の真価のあるところであろう。――このプラグマティズムについては、敗戦後のわが国の哲学者や評論家たちが絶えず解説を与えてくれていることだから、ここで私が半解の言葉を弄ぶ必要はあるまい。ただ、先ごろ或る本を読んで、ウィリアム・ジェイムズたちの思想態度をあらわすものとして、「言葉を考えることでなく物事を考えること」というのに出逢って、いまさら感じ入りながら、この数年――いや数十年数百年、我々は言葉によって考えることばかりをして、真実のありかを見失い、生命をひからびさせつづけていたのだ、という想に呻吟したことを告白するにとどめよう。事物的思考の訓練を身につけるほかには、我々を今の泥沼から這い上らせるみちはない。それまでは、名実共にそなわった「現代人」となろうと思うことも、ただ一片の野心に終るであろう。

アメリカのことにつけて、ちかごろ私を訪ねてきた青年の、ソヴィエト大使館でみたという映画のはなしを思い出す。――それによると、そのソヴィエト映画というのは、「トルストイやドストエフスキイのロシアはどこへ行ったか」とおもわせるようなものであり、「アメリカ式」のスマートな身装の男女が明快きわまる挙措動作をみせ、また室のセットなどにしてもアメリカ映画に見るようなものであったそうだ。私自身がみたのでなく、また一個の映画から全貌を推すことは危険だが、さもあるべし、と感じさせるものはそこにあるであろう。今日のソヴィエト人のすべての生活がそのように明快なものになっているかどうかは問題であろうが、そこに「かくあるべし」として示されたソヴィエト的生活の標本図を認めることはまちがっておるまい。

現在の世界は、政治的に見れば、アメリカとソヴィエトとの二つの勢力に分たれて対立していると云われるが、もし文明的に見るとすれば、全く別な色分けの地図になるのでなかろうか。つまりアメリカとソヴィエトを打って一つとした「新時代文明」と、その残余の「旧時代文明」との二つに分れているということになろう。この二様の対立模様の交錯のうえに、この後の世界の運命がもつれて行くことであろう。

*

その世界の模様図の中での我々の位置を考えてみるとすれば、我々は、行動を自己のものと為し得た現代の勝者の二大集団に圧される旧世界の一端に引っかかっている島嶼の住民だということになる。そして、そのような位置から

か、本来の気質からか、我々は旧文明の伝統と新文明の進歩性との間を、いそがしい振子のように、ほとんど発作的に無我夢中にうごきまわって模索するという癖があるようである。しかしそのことについては後に書くことにして、ここではただ、私自身が現代人でないと強く感じていることを表白するのにとどめよう。私は旧いロシヤの小説の反復的読者である。また昨日今日は、思想と行動との亀裂の悲劇「ハムレット」を読んでいる。また近来にもっとも心を打ったのは「論語」の一節であった。――それはあまりに名高いところだが、念のために書抜いておこう。

――ある時孔子は、子路、曾晳、冉有、公西華に向っていった。お前たち日頃知己を得ぬと嘆いているようだが、もしいま使ってくれるものがあったとすれば、何を為そうと思うか、若いからといって遠慮せずに、その抱負を語ってみるがよろしい。即座に子路が答えた。「千乗の国、大国の間に摂り、之に加うるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てするも、由や之を治めば、三年に及ぶ比、勇ありて且つ方を知らしむべし。」次に冉有が答えた。「方六七十、若くは五六十、求や之を為めば、三年に及ぶ比、民を足らしむべし。その礼楽のごときは、以て君子を俟たむ。」

公西華は、「之を能くすというに非らず、願くは学ばむ。宗廟のこと、若くは会同に端章して、願くは小相たらん。」

孔子は三人の言葉をきいて微笑したのであったが、低くかすかに瑟を鼓してばかりいた曾晳に、重ねて意見を吐かせようとした。ようやくのこと、あの名高い返答が生れた。「暮春には春服既になり、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じてかえらむ。」

そして「夫子喟然として歎じて曰く、吾は点に与さむ。」というのは、註釈の本によれば、孔子は曾晳には匙を投げた形でそのように歎じたのであり、孟子にいわせれば狂人のたぐいだった、などというのと、曾晳の心のゆたかさを愛したのだというのと、二つの解釈があるそうだ。もとより私が意見を挾むことなど不可能だが、ただ分らぬままに、後者の解釈に惹きつけられている。中国の古典には如何なる種類の思想も含まれているといわれるが、この一連の問答も、まざまざと今日このごろの日本を諷している感がある。ただ、「日本再建」「文化国家」「世界的交流」などという「現代人」的な政治家や文化人の叫びのなかに、曾晳的な声が、低くかすかにもきこえては来ず、またそれをゆるした孔子の声ももちろんないということを寂しく思うのは、私だけであろうか。

近年の日本には烈しい努力主義ばかりがあり、ゆとりある怡楽の心も習俗もまったく影を没してしまっていた。しかもその息苦しさはその努力主義自体を不健全なものとし、

破綻はそのような病症からしても避け得ぬものになったのであった。私は、敗戦後にわかにかまびすしくなった人間主義の声が、もう少し前からあればよかったと口惜しくおもい、せめて今でも、その烈々たる人間主義の叫びのかげから、かすかな悲の音が流れてくることを望んでいる。——話が飛ぶが、モーロアの「フランス敗れたり」を読んだときの感想を今ここでおもい出す。そのとき、理由は分らなかったが、その本の中に出てくる政客たちが少しも楽しげでない、という漠然たる、しかし強烈な感じを有った。イギリス人ならばあのような時にも、もっと気楽な表情だったかも分らぬ。自然や交友や読書や美術や音楽や運動や、とにかく自己を忘れ自己をたのしませるものを有たぬ人物は危険だ。権力と物慾と肉慾との喘ぎが二六時中その行動を駆り立てる。そのような人物にみちた社会は病んでくる。現代の世界の流行病であるところの非寛容の心なども その一つの徴候である。——私は一時期のフランスの一部分にそういう病状が起ったのだろうと想像してみたばかりであって、その全体を侮る心はない。それよりも、我々の国がもっと重症にかかって居たのであり、まだそれから恢復していると見えぬことをかえりみたい。

アメリカ人の行動主義が幸福な健康なものであるとすれば、彼等が「沂に浴する」心もちを、その行動自体のうちに見出して楽んでいるからにちがいない、と、この今の時に楽みについて思い耽るとは何ごとだ、という譏笑が耳もとにひびく心しながら私は思う。あるいは、バビットなどの「新人本主義」的思想がアメリカでどれほどの力を有っているかは知らぬながらに、その中に支那古典思想への理解と尊敬とが強く入っていることが必ずしも偶然でないだろうと思ったりする。

「論語」の一節に劣らず私の最近の心にひびいた一つの文句がある。中国とともに、この戦争の渦乱の中を粘りづよく生き抜いた国の一詩人のいったことである。

「改良は直線の道をつくる。然し改良なくして迂曲せる道こそ天才のものである。」(Improvement makes straight roads; but the crooked roads without improvement are roads of Genius.)(ブレイク「天国と地獄との結婚」より。)

この言葉も、反現代人的であること、「論語」のあの一節に勝るとも劣らぬであろう。しかも十八世紀の詩人だけでなく、現在でもイギリス人は同じようなことを云いつづけているのだ。ゴールズワージの「フォーサイト・サガ」の末尾に近く、一主要人物は、歩きなれた倫敦の道路で夜霧に巻きこまれて迷児になってしまい、しばらくは忌々しがるが、やがて、いやこの霧がある限りは俺たちイギリス人は大丈夫だ、と考えるのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo